

バットミュージアム(仮称)開館に向けて

平成21年10月

我が南砺市福光地区は大正時代後期より木製バットの生産地として全国にその名を誇り
今なお生産30万本中20万本が福光地区5社で生産されております。
全国のバット工場のルーツは福光から発していることは各メーカーとも認識いたしているところで
あります。

そのような中、戦前戦後、現在と多くの野球選手が愛用し、とりわけ当地の技術力の高さから
多くのプロ野球及びメジャーリーガーの選手のバットを生産しているところであります。
2年前そのバット工場の第一人者であった波多製作所が廃業し現在福光では5社が生産しています。
波多製作所廃業のおり廃棄物として処理されようとしていたバットを当方が管財人より買受け福光の
貴重な財産としてプロ野球選手のバット約1300本保持しています、他福光の各社の協力を得られると
相当数に膨らむものとなり一同に展示すれば素晴らしいバットミュージアムになる可能性があります
現在我が国では未だバットのミュージアムが存在いたしておりません、これはやはり福光をさしおいては
開設できない旨を承知しているからであります。

野球関係のミュージアムでは

野球体育博物館(東京ドーム隣接)バット展示130本程度
落合記念館(和歌山県太地)
松坂大輔記念館(北海道稚内)
城島健司ベースボール記念館(長崎県佐世保)
松井秀喜ベースボールミュージアム(石川県根上)
星野仙一記念館(岡山県倉敷)
イチロー博物館(愛知県豊山)
赤星記念館(愛知県刈谷)
吉澤野球資料館(千葉県船橋)

などがありますがバット単独ではいまだありません。美津濃スポーツバット工場がある岐阜県養老や
ゼットの工場がある福井県武生が狙っているかもしれません。

南砺は世界遺産は勿論文化芸術的なミュージアムはありますが、いずれも若年層向けとは云えず
観光的にも是非バットミュージアムの開設を提言させていただきます。

個人的には財政上など不可能と思われますので是非南砺市にて検討いただきますようお願い
申し上げます。

ジャパンバットミュージアム設立発起人
南砺市野球協会会長 嶋 信一



平成21年7月1日発行(寄附月1日発行)第33巻第5号(通算185号) 平成11年7月15日創刊
詳細DATA付き歴代プロ使用バット120本一挙掲載

定価1000円

ベースボール・マガジン社 寄附月19日発売

Baseball Magazine

7月号

July issue 2009

Vol.33 No.6



谷沢健一

[元中日]

久保田五十一

[ミズノ・プロバットマイスター]

駒田徳広

[元巨人ー横浜]

大島康徳

[元中日ー日本ハム]

松瀬 学(ノンフィクションライター)

バットに託したゴジラの狙い

松井秀喜バット変遷カタログ

豊田泰光
伊東 勤
小関竜也
松本匡史
笠篠賢治
田尾安志
池山隆寛
岡田彰布
大塚光二
高木 豊
高沢秀昭
種田 仁
小早川毅
白井一幸
若松 勉
高代延博
本西厚博
田中幸雄

バットが
なければ、
はじまらない

「パットの街」は、東京から遠か遠い場所にあった。富山県は、旧福光町。現在の南砺市である。目指す駅はフラワーラインとも呼ばれる城端線の福光駅。チューリップ畑の咲える車窓で有名な路線でもある。

東京からだ、越後湯沢駅で乗り換え、北陸本線へ。そこから、世界遺産として知られる白川郷に程近い城端駅まで通じている。１時間に１本程度の電車しかないローカル線に乗り継ぎ、高岡駅から数えて10駅目が福光駅だ。

「バットの街」に辿り着いたのは、東京を発
つてから、5時間余りが経過したころのこと
だった。

思いのほか、寒さを感じない。福光駅前では、棟方志功の版画をモチーフにしたモニユメントが目を引く。

この日本のゴッホは、戦時疎開のために1945年にこの地を訪れ、54年まで滞在したのだという。事前にほとんど調べをしていなかったこともあり、意外な印象を受けるが、今回の目的はあらためて確認するまでもなくバットの取材。まず初めにアポイントメントを取った人に会うため、約束した場所へと急いだ。

この地で興隆を極めた波多製作所の2代目の次男に当たるのがその人。長らく営業部長を務め、「バットの街」の歴史を知る波多登志弘さんが、約束しておいた時間通りに現れる。今年74歳を迎える、「バットの街」の歴史をよく知る人物だ。

最初は農業兼蚕糸業を営んでいたらしいです。そんななか、波多製作所の初代、栄吉が家業を継ぐのを嫌って名古屋の中山商店というところへ奉公に出たということです。算盤などの文房具や運動具を作っていたところ

チエ、志、功、ト

福北
光陸
を

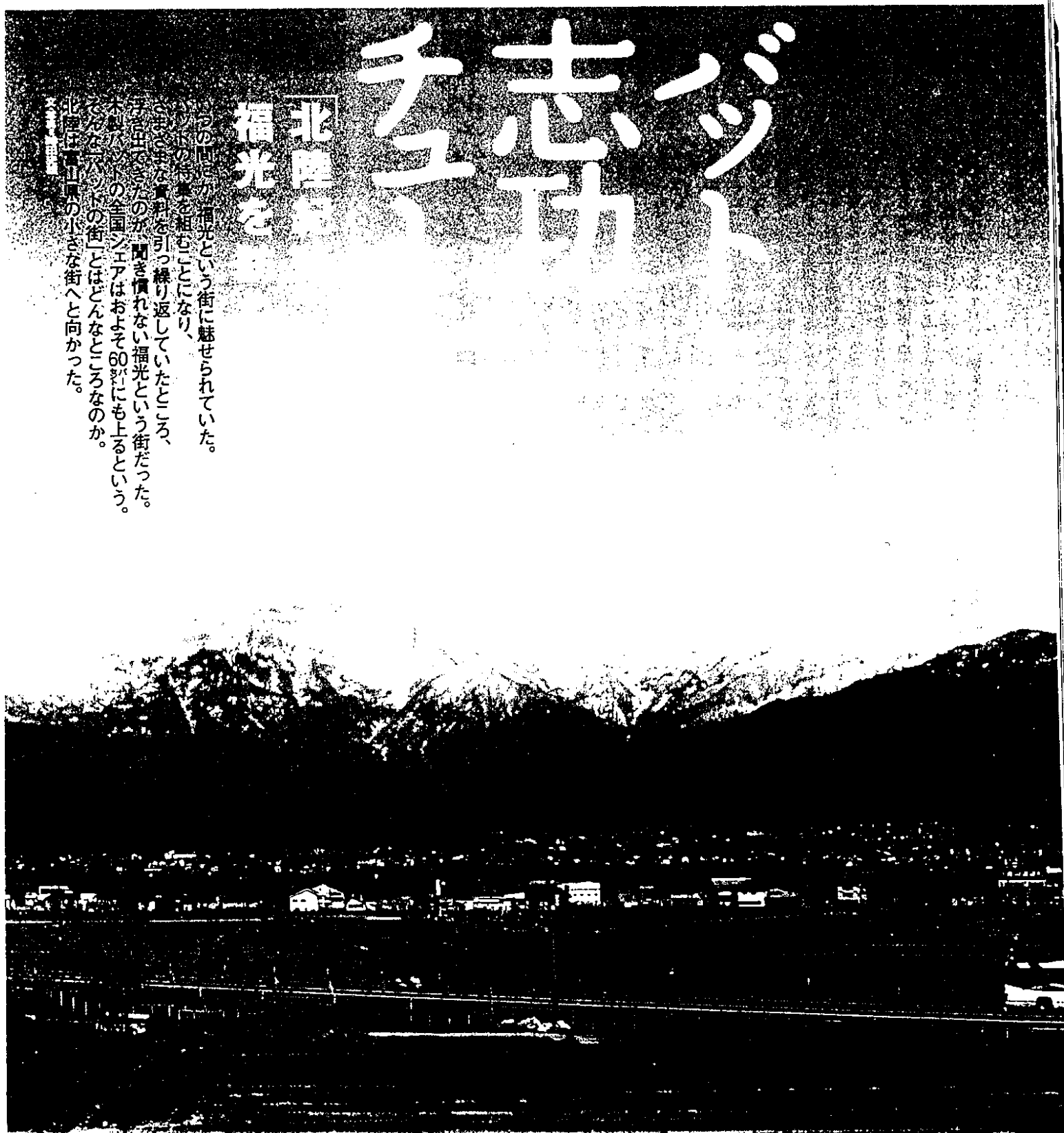
この間に、か福光という街に魅せられていた。
この街の特長を組むことになり、

とまあまあ資料を引っ繰り返していたところ、
うき出できたのが、聞き慣れない福光という街

木製バンドの全国シェアはおよそ60%にも上るといいう

そんな「ハットの街」とはどんなところなのか

北陸は富山の小さな街へと向かった。



で、その技術を持ち帰って、最初は陸上競技で使う槍や円盤を作っていたらしいですね。バトンなどもそうですが、ウチの製品を10個持って売りにいけば、その倍以上の注文が入ったといいますから、評判も良かったんでしょう。そして、二代目の錦一も同じように中山商店で修業しました。バットに目が向いたのは、昭和の初めくらいのことだったと聞いています。

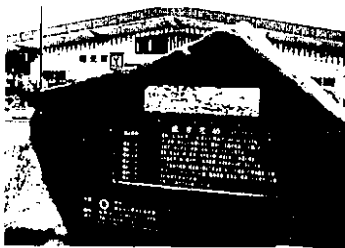
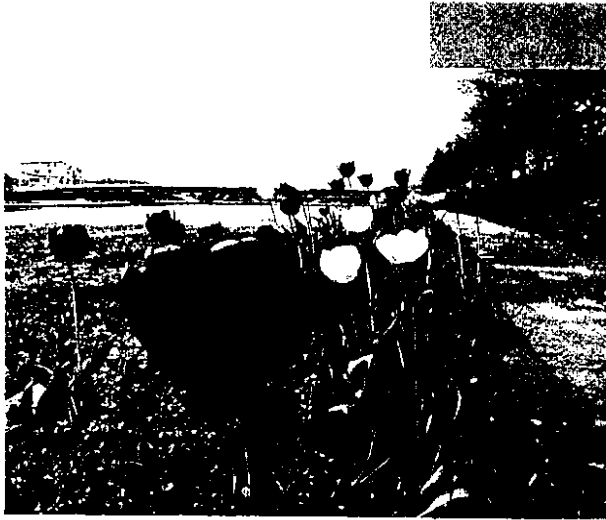
もともと、バットだけでなく、当初はスキー板にも力を入れていました。自衛隊に卸していましたし、三浦雄一郎さんの父、敬三さんがウチのアドバイザーでした。当時の材料にはトネリコを使っていたんですけど、これはこらへんの名産品である干し柿を吊るす木なんです。そんなことも、バットと縁があったんでしょうか。材料は北海道と九州から運んで、福光で行うのは加工だけ。経営立地論でいえば、ここが、東京、大阪、どちらから同じような距離ということが良かったのかもしれない。

そういえば、昔は北海道から福光駅に届いた材木を馬車で運んでいたものですよ。乾燥が追い付かないから、そこいらじゅうにイゲタを組んで置かれていました。

残念ながらその後、金属バットの普及や少子化に伴う野球人口の減少もあり、波多製作所は2006年10月に破産宣告を受けた。全盛期には400人もの職人を擁していたというが、破産時には従業員が3人に減っていたという。

ときに現実残酷で悲しいものである。とはいえ、この福光の地に木製バットの文化を根付かせた功績がなくなるわけではない。現に、いまでも福光に残るバット工場の多くが、波多製作所が源流となっている。

それにしても、あの福光駅に馬車が……波多さんの話に聞き入り、意識が遠い昔へ運ばれているうちに、ひよんなことを思い付け



ロンウッド

エスオー・スポーツ工業

福光駅

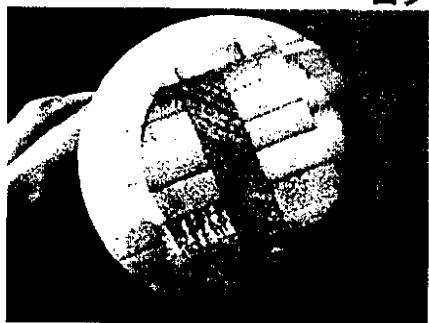


波多製作所を源流に 時代を経て様変わりする それぞれのこだわり



アイデアマンとして名高い
ロンウッドの池田与作さん
(写真右)と真一さん。最
新技術を取り入れながら、
4つのポリシーを掲げて独
自の道を歩み、ヒット商品
を送り出している

ロンウッド



次世代を踏まえ、ロンウッドが開
発に取り組んでいる竹とヒッコ
リーの合板バット。将来的には広
く流通していく可能性を秘める



ロンウッドで現在も働く御
年78の定村実さん。いま
でもバットを削る作業が楽
しくて仕方がないのだとい
う、バットの歴史の証人だ

それに、バット削りには教科書がないから、体で覚えるしかない。削る以前に刃物を研磨する技術を身に付けなければならぬし、自分の思っている通りに仕上げられるようになるまでには相応の時間がかかります。だからこそ、自分の思い通りにバットを作れたときの満足感は何物にも代え難いものだし、やりがいのある仕事だと思えます。それに、自分の作ったバットの反響がダイレクトに伝わってくるのもいい。

昔はラジオでナイター中継を聞くのが楽しみでねえ。プロの選手に、フィーリングの合ったバットを使ってもらえるという喜び。素材こそ、トネリコ、アオダモ、圧縮、ホワイトアッシュ、メープルという変遷があったけど、その喜びは変わらない。いいバットを作るには、まずいい素材を見極める基礎がないとダメ。それぞれに年輪の幅が違うし、同じ一本の木から採った素材でも、質は異なる。思い出すのは卸しメーカーが倒産してからもウチのバットを使ってくれた掛布雅之さんとの付き合いだけど、まず材料選びの段階で1ダース分を探し出すのも難しかったですね。

ヨと呼ばれる屋敷林が、健気に守っているように微笑ましい。そんなことを考えつつ、長らく遠ざかっている、野鳥や虫、風や川のせせらぎといった心地良い音に聞き惚れながら歩いていると、エスオー・スポーツ工業が唐突に現れた。人懐っこい笑顔で、「よく来たね」と大内弘さんに出迎えられる。67歳になるこのエスオー・スポーツの社長も実は波多製作所をルーツに持つ。戦死した父親が波多製作所の職人だったのである。

大内さんは、これまた波多製作所から独立した職人の興した富山運動具店でバットを作り始め、10年ほど務めたのちにエスオー・スポーツ工業を立ち上げたのだという。

バットの街に いまでも息づく 先駆者の執念

金属バットの普及という時代の荒波が押し寄せたときには、木製バットの製作に見切りをつける者も少なくはなかったという。それでも、大内さんはあくまでも木製にこだわりの続けた。それは信念に従ったものだといっている。

「オーダーバットは、これからは機械で作るのは難しいだろう。それほど儲かるわけではないし、決して甘い世界ではない。でも、木で生きる道はあるはずだ、ってね。なぜなら、こうも思うんです。木には個性がある。そんな木を使って、同じものを作っても意味がねえな、と。大量生産には面白くないですよ」

そんな職人気質の大内さんに魅力を感じてのことだろう。ある日、大阪と岡山からそれぞれ、「どうしてもバットを削りたい」と訪ねてきた若者がいたという。前述したように、甘い世界ではない。「もう一度、よく考えなさい。そうやって一度は送り返したものの、バット製作にかかわりたいという気持ちに変わりはなさそうだ。」

それなら、ということでは、まずは半年やってみなさい、という経緯に至った。いまでは、大内さんのその若者たちに対する評はなかなかのものだ。

「まだ人に見せられる段階ではないけど、かなりのレベルまで野球をやっていたようだ」

し、根っからの野球人なんでしょうね。仕事ぶりは真面目だし、かなり削れるようになっていきますよ」

メガネの奥の目は、どこか誇らしげだ。

「バットはね、消耗品ではないんですよ。選手の手の一部ですから」

そう言って、再び、金銭には換えられない、やりがいのある仕事ですよ、と繰り返したその表情に、気品のある誇りが仄かに漂っていた。

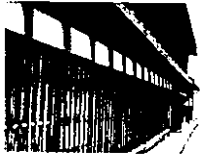
後発だからこそその強み 新たな取り組みを軸に

「ウチと同じように、煙突が目印だから」という大内さんのアドバースを受けながら、エスオー・スポーツ工業をあとにした。ロンウッドへと向かう道すがらにも、棟方志功の版画をモチーフにしたレリーフがところどころで見受けられる。

ロンウッドに到着すると、バット製作を手掛け始めた代表取締役の池田真一さんと、その息子で取締役兼画部長の池田真一さんが取材に対応してくれた。さまざまな資料を用意して待ってくれていた真一さんがさっそく説明を始める。

「ウチには4つの基本精神があります。耐久性、飛距離、安価、環境への配慮です」

ロンウッドの前身である池田木工所がバット



トを作り始めたのは、1959年ごろのことだったという。もともとは精米機などの農業機械を手掛けていて、木製食器を経ての転換だった。バット製作に関しては、ここ福光でも後発という立場になる。だから、と手作さんは続ける。

「ほかのところの得意先には、絶対に手を出さないと決めたね。まあ、力がないからということもあったけど。でも、それはいまでも信用という財産につながっていますよ。おかげさんで、このバット市場とも親しくさせてもらっていますし」

そして、それがこだわりにもつながる。理念がそれぞれ異なる中小の御しとの付き合いが中心になったことで、独立独立への傾向を強めたのだ。

ゴルフの石川遼選手が愛用することで一躍知られるようになった素振り専用用の「バワフルスイング」を例に出すまでもなく、「バット製造界のエース」とまで呼ばれた手作さん、そしてその血筋を受け継いだ真一さんともにアイデアマン。ゲートボールのスティックなど野球以外の用具も開発しながら、野球バットの未来を模索している。

バットに限らず、野球に関するあらゆる文献を内外から取り寄せるなど、真一さんは野球の文化に対する造詣が深い。そんな真一さんがまさきに見せてくれたのは、次世代のバットだった。

野球をする上で、バット代というのはかなりの比重を占めているんですね。それに、バットはたった1球で折れる可能性もある道具です。だからこそ、ウチは世界最安供給を目指しています。

そこで、開発したのがこの竹のバットです。これは芯にヒッコリーを埋め込むことで、耐久性もクリアしています。飛距離も出るし、安いし、環境にも優しい。まずは大学や高校の練習用として考えています。それ

に、いずれはアメリカにも輸出したいので特許を申請中です。

バットの素材を考えていくと、どうしてもこれからは竹に力を入れざるを得ないということに行き着くんです。竹ならいろんなところに生えているし、成長も早いし、なおかつ安い。少しでも新しい取り組みをしていくというのが、ウチの姿勢です。

そんななかで、実は最も力を入れているのがノックバットなんです。ノックをするのはチームの監督やコーチですから、バットの購入権を握っている方ばかりでしょう。そうした顧客の方たちの要望を聞いて、それにこたえることで満足いただき、ウチはやってきたという側面があります。

とにかく、バットは面白いですよ。やればやるほど、いろんな発見があるし、意外なこともたくさんありますから。

データを残す一方で 数値化できない面白さ

そんな新進気鋭のバット職人集団・ロンウッドと密接な関係にあるという人にも、取材の約束を取り付けていた。

「先日会ったときに、聞きましたよ。溝口さんには、よく相談に乗ってもらっているんですね。特許を取るのにも、データをそろえなければなりませんから」

真一さんが別れ際にこう切り出した人は、溝口正人さん。富山県工業技術センター生活工学研究所に務める、工学博士だ。

広い研究室には、ゴルフクラブを正確に、そして一定の力で振ることのできるロボットが鎮座する。そして、見慣れない巨大な装置が目が留まった。それはバットの製品評価を行うためのものだという。バットにぶつけるボールは、2500m程度のスピードまで自在に噴出することができ、つまり、耐久性ばかりでなく、弾き返す力の強さを、あらゆるデータを得られることのできる貴重な測定

マシンだった。

溝口さんは10年ほど前から、主にバットやゴルフクラブの研究、開発に携わっているのだという。ロンウッドで稼動している自動木工旋盤機も、溝口さんが開発したものだ。

これはバット作りの後継者が減っているという現状をにらんでのものには違いない。しかし、それだけにとどまらず、削りまでの一連の作業を自動化するとともに、測定したデータを残すという重要な役割も担っている。

当初は測定から削りまで2時間ほどかかっていたものが、いまでは30分ほどにまで短縮した。削りだけなら、職人のおよそ半分の7〜8分。実際にロンウッドでは、プロ選手へ提供するバットを機械が黙々と削っていた。

これまでのバット作りというのは職人芸です。データベースがないんです。かといって、ゴルフクラブほどテクノロジーが詰まっているわけではありません。だから、バットのデータを集めることが私の仕事のひとつになっていて、いまは300ほどのストックがあります。たとえば一人の選手を追っていくことで傾向をつかんだり、これまで感覚的に、曖昧に言われていたことを、もう少しシャープに、明確にしようということです。

まあ、ロンウッドさんが引き金ではありませんね。ここにしよちゅう来られて、あれもやりたい、これもやりたいとなつて、世間話のなかからアイデアが出ることもある。石川遼君のスイングバットにしてもそうですけど、作ってなければ意味がないわけじゃないですか。私はその手助けをしているという形になりますね。

ただ、木製だからこそ、バットは奥深いし、面白いところがあります。絶対に科学では解明できない、機械屋が手出しのできない、いわば神の領域が残りますから。外見上は、同じものを作ることはできます。感性モーターメントを使えば、ある程度まではバ

トから人間が感じるであろうことも数値で表すこともできる。それを突き詰めたい一方で、しなる、しびれるといった一流アスリートやバット作りの名人が表現するような部分は残しておきたいですね。

ただし、木材がほかの素材に取って代わられる可能性もないわけではありません。ですから、次世代をにらんだことは常に模索しておくべきだと考えています。

現在、福光に居を構えるバット工場は5社。1年間に日本で生産されるバットはおおよそ30万本。そのうち、20万本が福光という小さな街から生まれているというところに驚かされる。さらには、宮崎の河南製作所、そしてゼットの武生工場が、福光を礎にするという。そして、溝口さんの研究にしても、バットだけを専門にしているというわけではないが、福光という土地ならではのものともいえる。

まさしく、「バットの街」。

波多製作所のみならず、壮絶な時代も過ごしてきたには違いない。「乾燥の段階で失敗し、すべて割れてしまつて、さめざめと泣いたこともある。廃業に追い込まれたのは、ほとんどが乾燥の失敗だったからね」。多くを語らない、池田与作さんのこの言葉には声を失ったものだ。

そんななかにあつて、「バットの街」の人々は、ことさら福光をアピールするわけではない。それでも、波多栄吉さんという偉大な先駆者のバットへの執念ともいえるべきものが、この福光にいまでも思ひついていることには、感動すら覚える。

資源の減少も追い討ちをかけるし、木製バットの行く末も定かなものではない。しかし、紆余曲折を経ながらも、バットにこだわ

り続ける人々が、確かにいる。福光という街では、バットと棟方志功とチユーリップが、なぜかマッチする。



ロンウッドが開発したアイデアあふれる商品。上がヒットした「パワフルスイング」で、下のものはスイング速度測定のできるバット



溝口さんが開発した自動加工機がこれ。購入すれば1000万円以上するものだが、改良を重ねて約200万円に抑えることに成功した